学校評議員会議記録

開催日時	平成２６年１１月２６日（水）１０時１５分～１２時１５分	
会　　場	本校会議室	
出席者数	学校評議員　４名	学校　８名
出席者氏名	森脇　久幸氏（ＰＴＡ会長） 入宇田尚樹氏（東京農業大学教授） 阿部　哲実氏（ｻﾝﾗｲｽﾞﾖﾋﾟﾄ施設長） 高田　　巧氏（高田ﾒﾝﾃﾅﾝｽ 代表取締役） 小中美喜夫氏（本校卒業生保護者）	・校　長　　　安　戸　岳　夫 ・教　頭　　　仲　條　正　輝 ・事務長　　　中　村　勝　彦 ・教　諭　　　畠　　　法　子 ・栄養教諭　　吉　田　千　鶴

1　学校長挨拶

2　説明事項

（１）センター的機能の取組について　　　　　※畠教諭よりセンター的機能の取組の説明

（２）学校給食と食育の取組について

※吉田栄養教諭より学校給食と食育の取組について説明

3　授業参観

4　質疑応答

パートナーティーチャー派遣事業について

①予算について

(森脇評議員)　パートナーティーチャー派遣事業は、道の事業であるとお話していましたが、保育園や幼稚園に行くことは予算化されていないと伺いました。

その場合、どのように対応されていますか。

(畠教諭)　本校の別の予算から支出して対応しています。ただ、本校の予算にも限りがあるため、最近は先方にお願いをして旅費を出していただけるようにお願いしています。一人分の交通費をいただいています。

(森脇評議員)　高校も同じ対応をしているのでしょうか。

(畠教諭)その通りです。ただ、このあたりの高校は本校に来て、来校しての相談があります。高校生になると走り回る子はいなくなるので、目立たないですが、学力が低いことや集中できない、あるいはコミュニケーションが上手に取れないなど先生方からの話から相談につながることが多いです。最近も地域の高校からの来校相談がありました。

②幼稚園、保育園の派遣について

(小中評議員)　幼稚園や保育園からの相談を最初はどのように始めているのでしょうか。依頼があるまで待っているのでしょうか。

(畠教諭)　今年度、情報交換会を４回行っています。情報交換回は４年目になります

が、今こそたくさんの幼稚園の先生方が参加していますが、つながるまでには時間がかかりました。幼稚園も当時から困っていましたが、幼稚園の先生方は、困った時に、特別支援学校に相談してよいかどうかも分かっていませんでした。最初は幼稚園にメールで案内を出したり、市の保健福祉課からも案内をしてもらっていました。また、研修会で幼稚園の先生方に会ったり、合同相談会で参加していた先生方に声をかけて、参加を呼び掛けていました。続けていくうちに、昨年ぐらいになってたくさん参加するようになってきました。発達支援センターとのつながりから幼稚園にも行けるようになりました。さらに、地域の子育て支援課とつながれたことも大きかったです。
（小中評議員）（幼稚園に）入り込んでいくことは、とても大変だったことと思います。（学校は）よくやっている。昔は幼稚園は、行政の区分けで学校とは管轄が違っていたので支援できなかったため、支援が抜けていた。今はそのようなことがないと思うので、うまくやっていただきたい。期待しています。

③パートナーティーチャー派遣事業の効果について
（高田評議員）　パートナーティーチャー派遣事業は継続していることがよいと思います。訪問先でできた宿題もあったと思うが、先生方や対象の子供たちが変わってきたという実感はありますか。
（畠教諭）　最初は先生方との懇談が中心でした。担任の先生も初めのうちは宿題を出されて、大変だったことと思います。今は、相談先のコーディネーターの方や管理職の先生方に同席してもらっています。相談になるとどうしても対象のお子さんだけのことと思われがちですが、周りの子供たちも含めてのことなので、学校としてどのように対応していくかをいつも考えてもらっています。そのように進めてきたことで、ケース会議でもいろいろな人の輪が広がってきています。私たち以外にも相談先の先生方がたくさん意見を出される方が増えてきています。
（高田評議員）情報交換会が果たしている役割もありますね。
（畠教諭）その通りだと思います。学校の中には校内の特別委員会の中で何を協議すればよいのか分からなかった学校が、パートナーティーチャー派遣事業でアドバイスをすると、方向性がはっきりして、学校が変わってきます。
（入宇田評議員）パートナーティーチャー派遣事業でかかわっている人数はどれくらいですか。
（畠教諭）コーディネーターは４名指名されています。一回の派遣では２名と複数で対応しています。普段は、コーディネーター２名で対応していますが、学校によっては進路担当の先生に同行してもらうこともあります。
（入宇田評議員）　学校の状況はそれぞれ違うと思いますが、相談したケースは持ち帰って分析すると思います。対応方法については、特別支援学校の児童生徒にも生かされていることと思いますが、校内の先生方に持ち帰ったものについて説明することはあるのでしょうか。
（畠教諭）今年度、資料にもあるように校外支援通信を４回発行して、情報提供を職員にはしていますが、説明する機会は設けていません。このあたりの地域の教育的ニーズを伝えたいと考えてはいますが、まだやれていません。

(阿部評議員)不登校の子供の相談はありますか。
(畠教諭)あります。
(阿部評議員)小学校、中学校、高校、どの辺りからありますか。
(畠教諭)小・中・高、それぞれからあります。
(阿部評議員)不登校のケースが、パートナーティーチャー派遣事業につながるまでには時間がかかるのではないでしょうか。
(畠教諭)時間がかかります。(対象のお子さんの育ってきた)背景や状況を理解したり、保護者がどこまで子供のことを知っているのか分からないとなかなか具体的なアドバイスができません。そのため、どんな連携・支援ができるかを中心に行ったときには話しています。
(森脇評議員)校外支援通信に引き継ぎの件が出ていましたが、引き継ぎがうまくいくようになって変わったことはありますか。
(畠教諭)　引き継ぎについて話題になることは個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成についてです。オホーツク管内は、引き継ぎのツールとして、育ちの手帳を活用していますが、幼稚園に行くと育ちの手帳のデータをほしいと頼まれることがあります。実情はほとんど作られていません。そこで、データを渡してアドバイスしたところ、少しずつですが、作り始めたところもあります。また、当初は進路先についてもどのように決めていいのか分かっていないケースがたくさんありました。そこで、たくさん見学をしてから進路先を決めるように伝えたところ、いろいろなところを見学してから決めるようになってきました。文書の引き継ぎについても、例えば中学校の先生と個別の教育支援計画の作成について話したところ、いろいろな相談を受けるようになってきました。個別の教育支援計画の作成は、本人と保護者と一緒に行いますが、相談先でも少しずつ作成し始めてきています。

5　給食試食

6　校長から
(校長) 今年に入り障害者の権利条約に我が国も批准しました。今まで批准に向けて、いろいろな法の整備・改正等されていくこととなると思います。例えば、昨年、学校教育法施行令の一部を改正する政令においては、就学先を決定する仕組みの改正がありました。また、権利条約では、ユニバーサルデザインという言葉が使われています。ユニバーサルデザインは障害者を含めたすべての人にとってやさしい環境を意味しています。このように障害者を取り巻く環境も変わっていくことと思いますが、本校も新しい価値観に対応しながら、教育活動を進めていきたいと思います。本日は、ありがとうございました。